

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第117集

田中Ⅳ遺跡発掘調査報告書

国家石油備蓄基地建設事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

田中Ⅳ遺跡発掘調査報告書

国家石油備蓄基地建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう幹線道路網の整備や港湾開発も重要な一施策であります。特に国家石油備蓄基地建設を中心とした久慈湾の総合開発は、県北の拠点開発として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の田中Ⅳ遺跡は、久慈湾に流入する夏井川右岸の丘陵地に立地し、昭和61年の発掘調査によって縄文時代の陥し穴状遺構が発見されました。当地方の狩場跡として貴重な資料になるものと考えられます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました久慈市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和62年7月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県久慈市夏井町字閉伊口6-64-37ほかに所在する田中Ⅳ遺跡の調査結果を収録したものである。本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はJG10-2116である。
2. 本遺跡の調査は、国家石油備蓄基地建設関連の道路新設に伴う緊急発掘調査であり、久慈市建設部および久慈市教育委員会と岩手県教育委員会事務局文化課との調整を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 野外調査は昭和61年4月10日から5月30日まで、室内整理は同11月1日から12月27日まで実施した。
4. 発掘対象面積および発掘面積は2,400㎡である。
5. 発掘調査は玉川英喜、平井進が担当し、室内整理および報告書作成は玉川英喜が担当した。
6. 野外調査および室内整理において、以下の機関から御協力をいただいた。(敬称略)
久慈市建設部
久慈市教育委員会
7. 野外調査の作業には、久慈市宇津目、田中、閉伊口、半崎地区の方々から御協力をいただいた。
8. 発掘調査の諸記録と遺物は、調査遺跡略号TNⅣ-86を付して岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	3	3. 基本層序	5
II 調査の方法	3	4. 周辺の遺跡	9
1. 野外調査	3	IV 遺構と遺物	15
2. 室内整理と報告書	4	1. 陥し穴	15
III 立地と環境	5	2. ピット	18
1. 位置と地形	5	3. 遺物	26
2. 遺跡付近の地形	5	V まとめ	26

図版目次

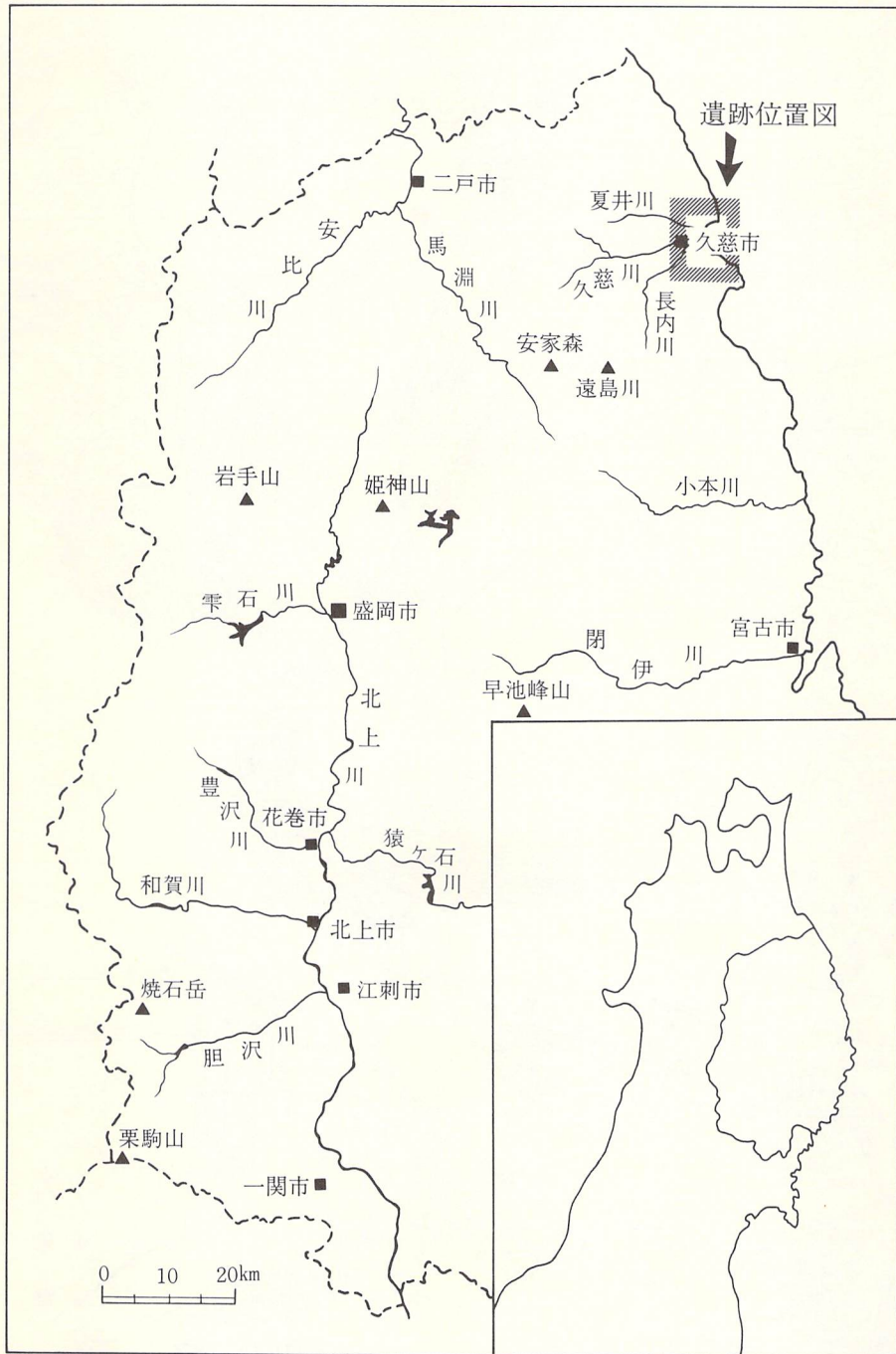
第1図 岩手県全図	1	第9図 陥し穴(2) ($\begin{matrix} E-3 \\ E-4 \end{matrix}$ 陥し穴)	20
第2図 遺跡位置図	2	第10図 陥し穴(3) ($\begin{matrix} F-1 \\ F-2 \end{matrix}$ 陥し穴)	21
第3図 地形分類図	6	第11図 陥し穴(4) ($\begin{matrix} F-3 \\ F-4 \end{matrix}$ 陥し穴)	22
第4図 調査区周辺地形図・グリッド配置図	7	第12図 陥し穴(5) ($\begin{matrix} F-5 \\ F-6 \end{matrix}$ 陥し穴)	23
第5図 土層柱状図	9	第13図 陥し穴(6) ($\begin{matrix} F-7 \\ F-8 \end{matrix}$ 陥し穴)	24
第6図 周辺遺跡位置図	10	第14図 陥し穴(7)・ピット ($\begin{matrix} F-9 \\ F-10 \\ F-11 \end{matrix}$ 陥し穴 F-11ピット)	25
第7図 遺構配置図	13	第15図 遺物	26
第8図 陥し穴(1) ($\begin{matrix} E-1 \\ E-2 \end{matrix}$ 陥し穴)	19		

表目次

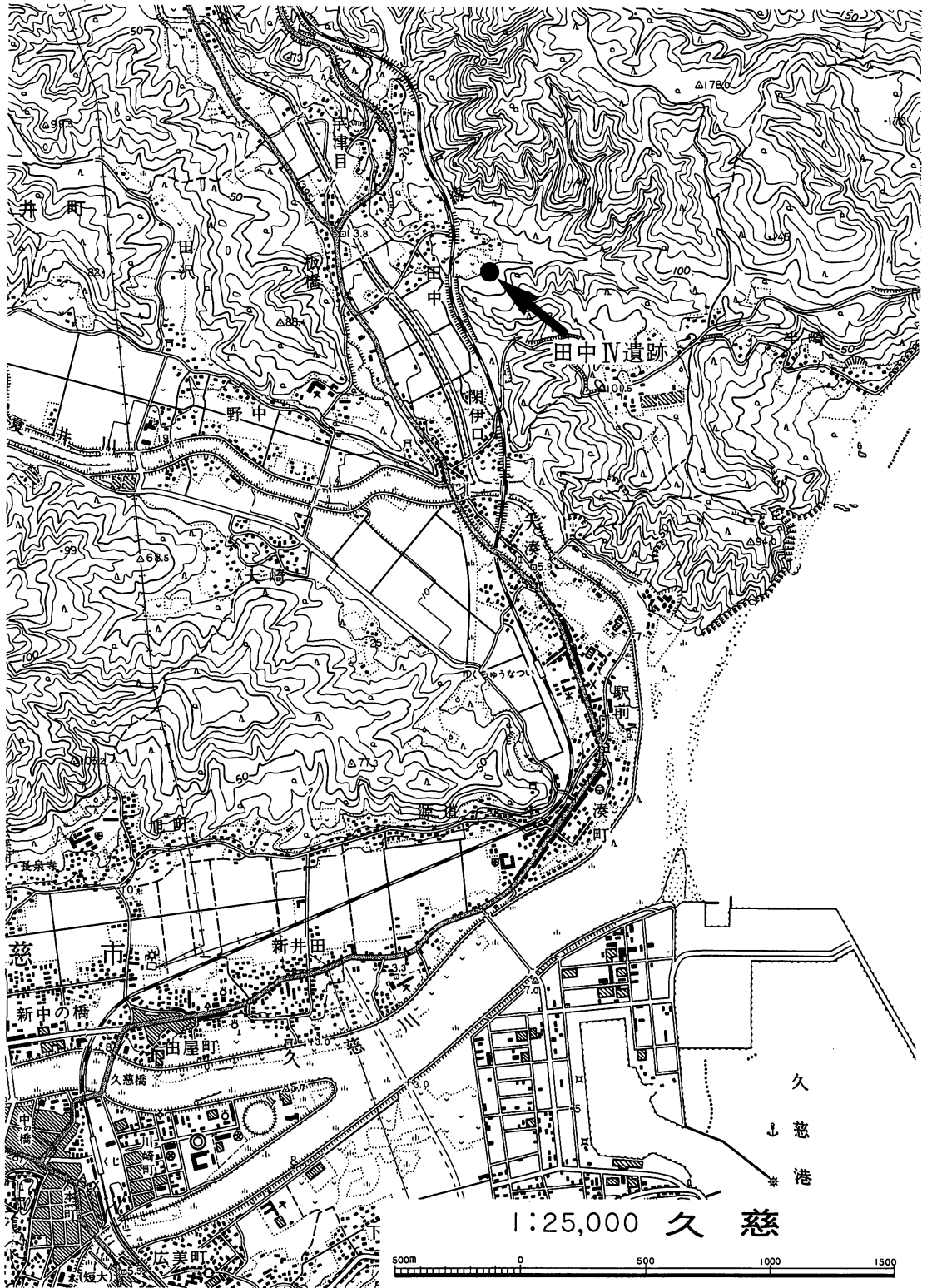
第1表 周辺遺跡一覧表	11	第2表 遺構一覧表	15
-------------	----	-----------	----

写真図版目次

PL-1 遺跡遠景・近景	31	PL-5 陥し穴(3)	35
PL-2 基本層序・作業風景	32	PL-6 陥し穴(4)	36
PL-3 陥し穴(1)	33	PL-7 陥し穴(5)・ピット	37
PL-4 陥し穴(2)	34	PL-8 遺物	38



第1図 岩手県全体図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

昭和53年度からの国家石油備蓄計画に基づき、昭和59年度までに全国7地点の石油備蓄基地建設が決定された。その間、昭和56年度には久慈市を含む3地区の地下備蓄基地候補地が指定され、石油公団による久慈地区の地質調査が開始された。翌57年度に至って県に企画調整部石油備蓄対策室が設置された。次いで昭和60年度政府予算に久慈地区の備蓄基地建設に係る調査費等が計上され、翌61年4月に石油備蓄基地の立地が決定した。

これに関連する埋蔵文化財の調査は、昭和60年10月1日付け石備第8号の「久慈地区国家石油備蓄基地建設に係る埋蔵文化財の分布調査について」による依頼があり、岩手県教育委員会文化課は同10月14～16日に同地区の遺跡分布調査を実施した。その結果、同地区内に田中Ⅳ遺跡等が確認されたことから同10月18日付け教文第393号により、石油備蓄対策監あてに回答した。

昭和60年12月6日、久慈市教育委員会から田中Ⅳ遺跡の発掘調査について打診があり、翌61年1月10日付け土木第721号により「昭和61年度国家石油備蓄基地建設関連道路新設に係る埋蔵文化財発掘調査について」の依頼があり、同1月16日県文化課及び当埋蔵文化財センターによる現地確認を行った。その際、田中Ⅳ遺跡に隣接する南西端については、久慈市教育委員会において遺構確認調査を実施することとし、同1月27日発掘調査の承諾について回答した。さらに調査面積については、当初の調査範囲から現地踏査を経て一部変更して確定した。

これにより県教育委員会文化課の調整を経た田中Ⅳ遺跡の調査は、昭和61年度における県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業計画に編入され、久慈市から委託をうけた当埋蔵文化財センターが昭和61年4月1日付け契約により着手することになった。

また、発掘調査報告書については、同11月10日付け依頼により、久慈市教育委員会の調査による隣接地520㎡の調査結果をあわせて収録することとした。

II 調査の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査範囲は道路建設予定地内に限定され、北東から南西に長さ約180m、幅10～25mで細長く延びる。グリッドは道路中心杭No42とNo39を結ぶ直線を軸線として設定した。No42を基点に

30m毎に軸線を直交する線で区切り、大区画とした。大区画をさらに3mメッシュで区切り、小区画とした。軸線は磁北に対して53度23分東偏する。グリッドの名称は、大区画を北から南へA区・B区……とし、小区画が北から南へa～j、西から東へは0～22を与え（第4図）、大区画名と組み合わせてAa0・Fc15というように呼称した。道路中心杭No42とNo39の平面直角座標第Ⅹ系による成果値および地盤高（L）は以下のとおりである。

No42	X=24,793.069	Y=81,685.243	L=38.54m
No39	X=24,750.656	Y=81,643.004	L=39.31m

(2) 粗掘り・遺構検出

当初、2m幅のトレンチを軸線に沿ったものと、軸線に直交するものを大区画毎に入れ、土層や旧地形および遺構と遺物の有無等を把握した。その後、遺構の存在が予想されたF区とE区の一部を人力で、他を重機で粗掘りした。粗掘り後、E区とF区から陥し穴・ピットを検出した。遺構名は種別に関係なく、大区画毎に1から番号を与え、大区画名と組み合わせてE-1陥し穴・F-11ピットなどのように呼称した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

溝状陥し穴は短軸に沿って土層観察用のベルトを残して掘り進め、ピット・円形陥し穴は2分法で行った。精査の各段階で、必要な図面の作成や写真撮影等の記録を行った。遺物は遺構内からの出土はなく、粗掘りで出土したものであり、層位を確認し小グリッド単位で取り上げた。

(4) 実測と写真

平面実測はグリッド軸に合わせた1mメッシュを基本とする簡易遣り方測量法によって行った。ライン名はDa5の北西端を座標原点とし、北方向をN1---、南をS1---、東をE1---、西をW1---とした。断面図は任意の高さで水平水糸を張り作成した。縮尺率はいずれも20分の1である。写真撮影には6×7版モノクロ1台、35mm版のモノクロとカラスライド各1台を使用した。

2. 室内整理と報告書の作成

整理作業は遺構実測図の点検、合成、トレース、遺物の仕分け、登録、実測、トレース、図版作成の順に進めた。

(1) 遺構関係

遺構図版は現地で作成した実測図を基本としてトレースし、掲載した。図版の縮尺率は遺構配置図が200分の1、他は40分の1である。遺構写真の縮尺率は不定である。

基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層名はアラビア数字で表し、層がさらに細分さ

れる場合はアルファベットの小文字を付記している。

(2) 遺物関係

出土遺物は石鏃・土器片・現代のものと思われる陶器片であるが、本報告では石鏃と縄文土器片（底部）の実測図、および石鏃とすべての土器片の写真を掲載し、陶器片は省略した。

図版の縮尺率は石器が原寸、縄文土器片が3分の2である。写真図版はおよそ縄文土器片が2分の1、他はすべて原寸である。

Ⅲ 立地と環境

1. 位置と地形

田中Ⅳ遺跡は岩手県久慈市夏井町字閉伊口6-64-37ほかに所在し、東日本旅客鉄道八戸線陸中夏井駅の北約1.6kmに位置する。

久慈市は岩手県の北東部に位置し、北上山地北東縁辺部にあたる。東側に太平洋を望み、西側に隆起準平原である九戸高原台地が広がる。海岸部には比較的単調な海岸線に沿って、南北に帯状の海岸段丘が発達する。第3図に示した分類図の中の段丘は照井一明氏（1982）の区分をもとに作成したものである。この地域を〈山地〉〈丘陵地〉〈台地・段丘〉〈低地〉に区分すれば、海岸段丘は丘陵地と台地・段丘にあたる。古い海岸段丘は侵食・開析されて、丘陵地に分類できるが、定高性がよい。侵食の進んだ丘陵地はV字谷が形成され、山地に似た斜面形態を示す。第3図の図幅中の白部分の大半は丘陵地にあたる。図幅に示した水系は久慈川およびその支流の鳥谷川等で、低地の大部分はこれらの水系によって形成されている。

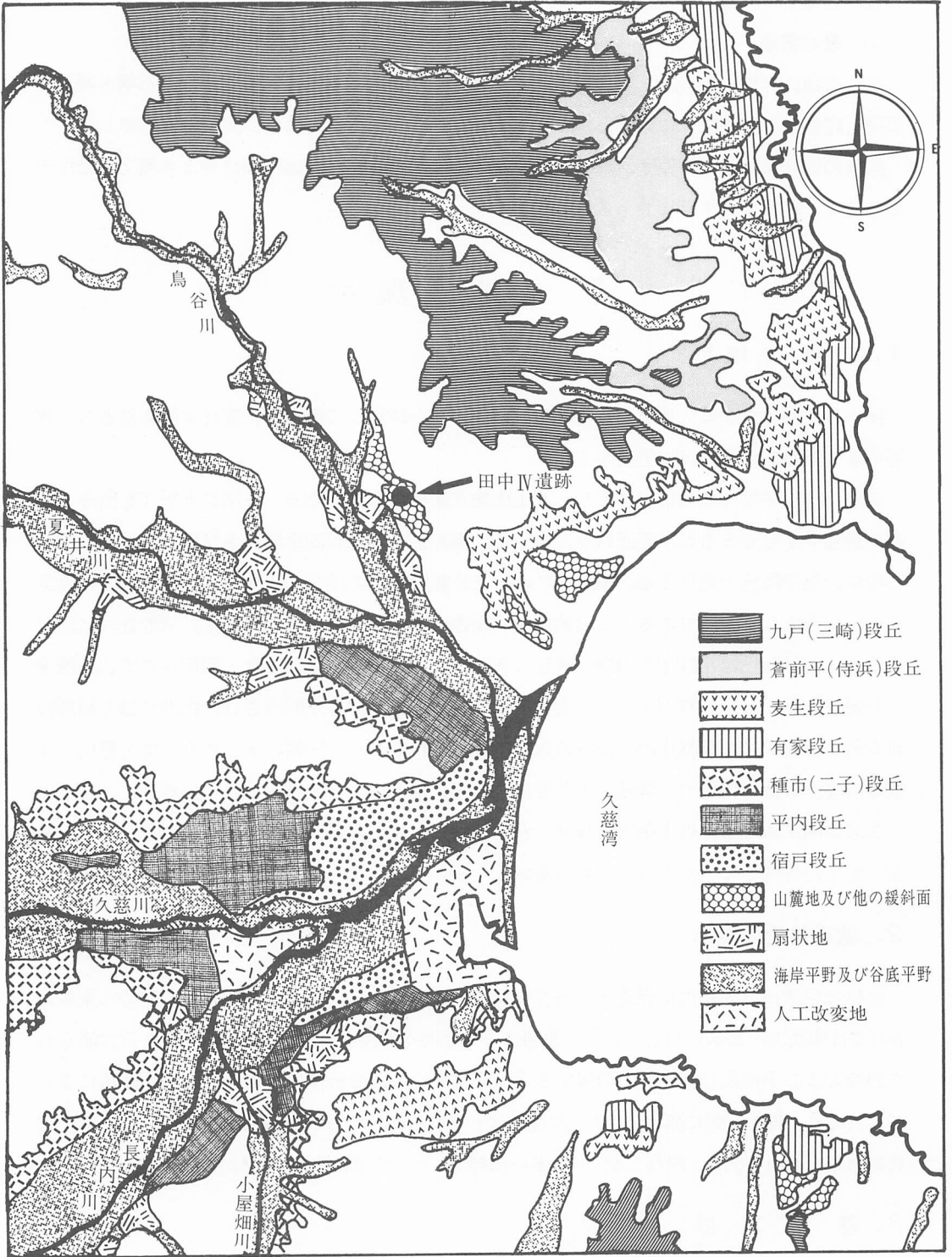
久慈市内にある遺跡の大半は丘陵地、台地・段丘上に位置し、その中でも種市（二子）・有家・麦生の各段丘に載るものが比較的多い。

2. 遺跡付近の地形

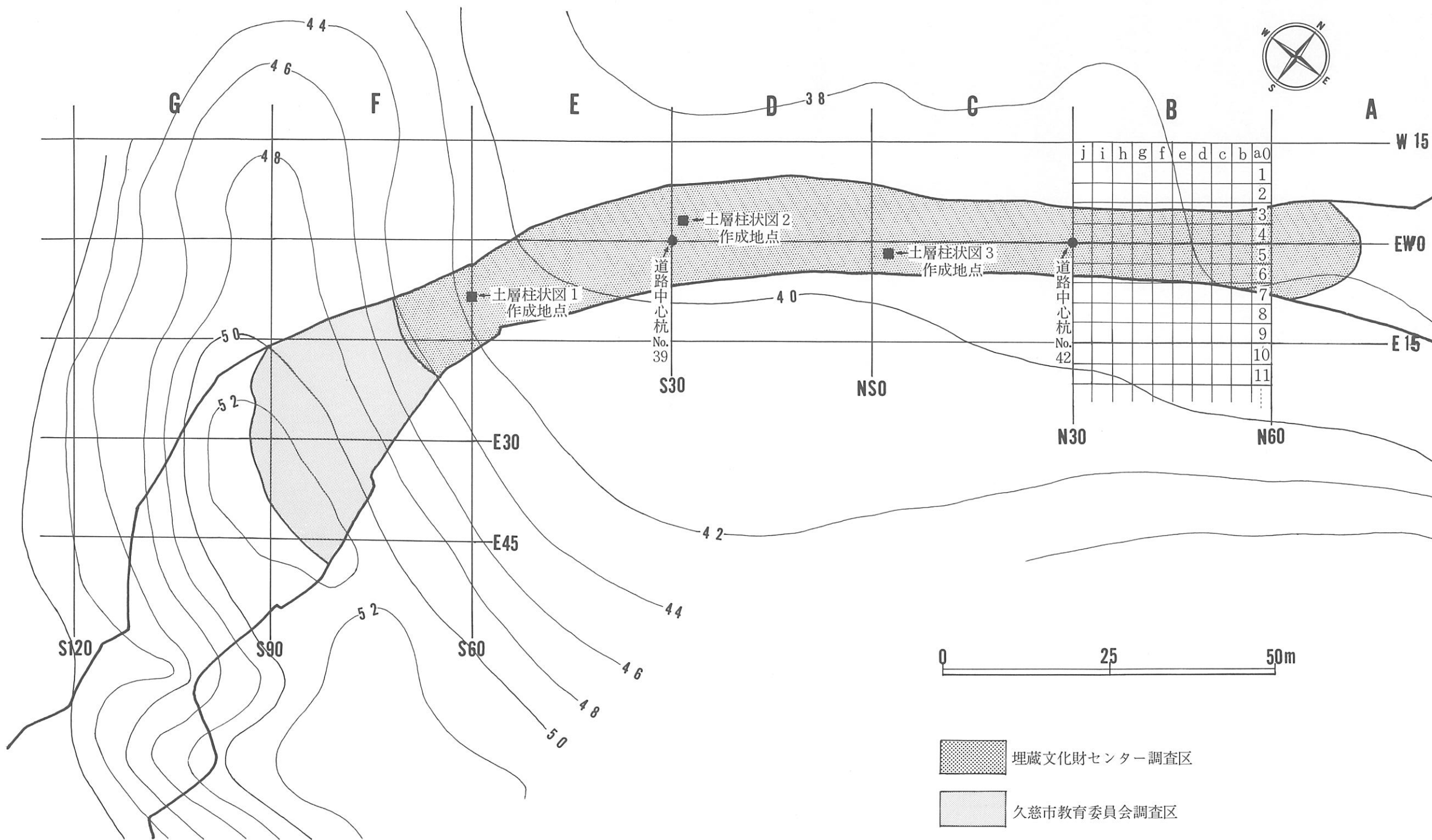
遺跡は閉伊口で夏井川に合流する鳥谷川左岸の丘陵地に立地する。遺跡の南側から東側にかけては標高50～80mの尾根が延び、北側は小さな沢が西流する。遺跡はその尾根と沢に限られた斜面および平坦面に載る。この斜面と平坦面は沢による開析作用と土砂の再堆積作用によって形成され、北西方向に開けている。調査地はその東寄りの一部で、標高は35～50m、鳥谷川との比高は25～40mである。現況は松・杉の多い山林で、かつては畑地として利用されたことがある。

3. 基本層序

第5図の基本土層図は約30m間隔のグリッドC j 5・D j 4・E j 7の3地点で作成した。



第3図 地形分類図



第4図 調査区周辺地形図・グリッド配置図

各層の概略は以下のとおりである。

I層 黒色土 (10YR 2/1) 表土で遺跡全面をおおう。層厚は15~30cm。現況が山林のため、草木根が多い。締りの弱いシルト質土である。

II層 褐色 (10YR 4~5) 砂質土の a層と黒褐色 (10YR 2/2) シルト質土の b層に細分され、両層が混じる部分もある。調査区南東側の尾根筋から流れ込んだ土砂で、C区を中心にB・D・E区の一部に堆積する。A区や遺構を検出したE・F区の斜面では本層を欠く。かつての凹地に沿って堆積し、現況の平坦面を形成した層である。最大層厚はa・b層合わせて120cmである。

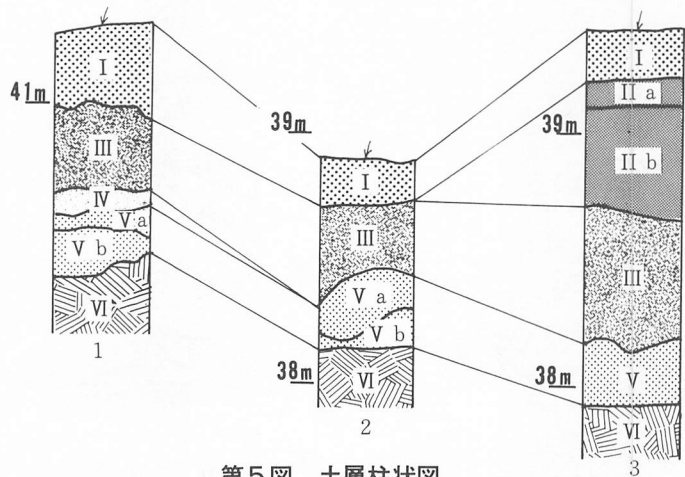
III層 黒・黒褐色土 (10YR 1 1/1~2/2) A区を除く遺跡のほぼ全面に堆積し層厚は30~60cmである。遺構埋土の黒色土系土層の多くは本層を起源としたものである。遺物を含むのはこの層までである。

IV層 黒褐色土 (10YR 3/1) 全体に褐色の粒状砂質土を霜降り状に含む。褐色土の混入割合によって色調が異なり、多いほど明色である。E~F区の緩斜面部に堆積し、A~D区とE区の斜面下方、F区の斜面上方では本層を欠く。多くの遺構は本層を検出面とする。

V層 暗褐色~黄褐色 (10YR 3/3~10YR 5/3) の粘土層である。色調によってa・b層に細分されるが、場所によっては漸移的に変化し、細分しえなかった所もある。遺構はこの層を掘り込んでいる。

IV層を欠く所では本層上面が検出面である。

VI層 明黄褐色 (10YR 6) の粘土層。V層に類似の粘土層であるが、礫を多く含み、色調もV層より明色である。掘り込みの深い遺構はこの層に達する。



第5図 土層柱状図

4. 周辺の遺跡

久慈市には遺跡台帳に179箇所の遺跡が記載されている。第6図にはそのうち当遺跡を中心とする周辺の95箇所を示した。図示した遺跡の種類別の内訳は散布地64、集落跡19、館跡11、貝塚2である。時代別では縄文時代早期から古代までの散布地や集落跡、中・近世の城館跡等、



第6図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	北野Ⅲ	散布地	縄文土器	侍浜町北野	49	麦生Ⅻ	散布地	縄文(後期)土器	侍浜町麦生
2	木戸場	集落跡	晩期、土師器	侍浜町第6地割	50	麦生ⅩⅢ	散布地	縄文(後期)土器	侍浜町麦生
3	向町農協倉庫北	散布地	中期、土器	侍浜町向町	51	田中Ⅰ	散布地	縄文土器	夏井町田中
4	向町Ⅰ	散布地	土師器?	侍浜町向町	52	田中Ⅱ	散布地	縄文土器	夏井町田中
5	向町Ⅱ	散布地	縄文(中・後期)土器、土師器?	侍浜町向町	53	田中Ⅲ	散布地	縄文土器	夏井町田中
6	向町Ⅲ	散布地	縄文(後期初頭)土器、土師器	侍浜町向町	54	田中Ⅳ	散布地	縄文土器	夏井町田中
7	向町Ⅳ	散布地	後期、土器	侍浜町向町	55	閑伊Ⅰ	散布地	縄文土器	夏井町
8	保土沢北	散布地	縄文土器	侍浜町北野	56	麦生Ⅳ	散布地	中期(末一後期初)縄文土器	侍浜町麦生
9	北野Ⅰ	集落跡	後期、土器	侍浜町北野第10地割	57	本波Ⅴ	散布地	縄文土器、石鏃	侍浜町本波12-39
10	北野Ⅱ	集落跡	後期、土器	侍浜町北野第10地割	58	麦生Ⅰ	散布地	縄文土器(前期)	侍浜町麦生6-8
11	保土沢南	集落跡	晩期、土器、鉢	侍浜町北野	59	麦生Ⅷ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生
12	向町Ⅴ	散布地	土器	侍浜町向町	60	麦生Ⅴ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生4-36-10
13	向町Ⅵ	散布地	土器	侍浜町向町	61	麦生Ⅶ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生4-36-22
14	横沼Ⅱ	散布地	土器	侍浜町横沼	62	麦生Ⅱ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生
15	横沼Ⅲ	散布地	土器	侍浜町横沼	63	麦生Ⅲ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生
16	横沼Ⅴ	散布地	土器、土師器	侍沼町横沼	64	麦生Ⅸ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生3-29-2
17	横沼Ⅳ	散布地	土器	侍浜町横沼	65	麦生Ⅳ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生1-2-8
18	横沼Ⅰ	散布地	土器	侍浜町横沼	66	麦生Ⅹ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生
19	横沼Ⅵ	集落跡	土器、円筒下層	侍浜町横沼	67	麦生Ⅵ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生1-22
20	横沼Ⅶ	散布地	土器	侍浜町横沼	68	寺里Ⅰ	集落跡	土師器、前期、後期、須恵器	夏井町寺里
21	保土沢Ⅱ	散布地	土器	侍浜町保土沢	69	天神堂	集落跡	縄文土器	夏井町天神堂
22	北野Ⅱ	集落跡	土器、石器	侍浜町北野	70	寺里Ⅱ	集落跡	弥生土器、土師器	夏井町寺里
23	横沼Ⅷ	散布地	弥生土器	侍浜町横沼	71	左峠館	館跡	空堀	門前
24	横沼Ⅹ	散布地	縄文(晩期)土器	侍浜町横沼	72	高城館	館跡	堀切、土塁	八日町
25	横沼ⅩⅢ	散布地	土器	侍浜町横沼	73	新城館	館跡	堀	夏井町大湊字新城平
26	横沼ⅩⅣ	散布地	土器	侍浜町横沼	74	明神	館跡	土師器	源道(明神)
27	横沼ⅩⅤ	散布地	弥生土器	侍浜町横沼	75	半崎南Ⅱ	散布地	製塩土器	夏井町開伊口字半崎
28	横沼ⅩⅥ	散布地	土器	侍浜町横沼	76	半崎南Ⅰ	散布地	須恵器、縄文土器、クレープ	夏井町開伊口字半崎
29	横沼ⅩⅦ	散布地	縄文(中期)土器	侍浜町横沼	77	半崎南Ⅲ	散布地	縄文(前期前半)土器、銅片	夏井町開伊口字半崎
30	横沼ⅩⅧ	散布地	土器、大洞A'式	侍浜町北野	78	昼場沢	散布地	縄文土器	門前(昼場沢)
31	夏井小学校裏	散布地	棚	夏井町(燕田)	79	下山	集落跡	土師器、須恵器、弥生土器	源道
32	夏井城	館跡	堀切	夏井町上夏井	80	金比羅	集落跡	縄文土器	源道
33	館ノ平館	館跡	堀、土塁	夏井町早坂	81	源道	集落跡	土師器	源道
34	大久保館	館跡	円墳(?)	夏井町早坂	82	旭町Ⅰ	散布地	縄文土器	旭町
35	鳥谷館	館跡	空堀	夏井町字鳥谷猿畑	83	旭町Ⅱ	散布地	縄文土器	旭町
36	西久保	散布地	縄文土器、石鏃、石斧	侍浜町白前字西久保	84	平沢Ⅰ	集落跡	縄文(後・前・中)土器、土師器	長内町平沢
37	本波Ⅰ	散布地	縄文土器	侍浜町本波9-15-5	85	平沢Ⅱ	集落跡	縄文(早・前・中・後)土器、土師器	長内町平沢
38	本波Ⅱ	散布地	縄文土器	侍浜町本波	86	二子貝塚	貝塚	縄文(前・晩期)土器	長内町二子
39	本波Ⅲ	散布地	縄文土器	侍浜町本波11-71	87	二子	貝塚	晩期前半土器、中空土偶、カキ、アサリ	長内町二子
40	本波Ⅳ	散布地	縄文土器	侍浜町本波11-22	88	上野山	集落跡	縄文(後)土器)土師器	長内町
41	田中館	城館跡	中～近世	夏井町田中	89	小屋畑	集落跡	縄文(後期)土器	長内町
42	鼻館	城館跡	縄文土器、土師器、陶器、環(?)	夏井町鼻館	90	平沢Ⅲ	散布地	縄文土器	長内町平沢
43	半崎Ⅰ	散布地	土器	夏井町半崎	91	大尻Ⅰ	散布地	縄文土器(前期)	長内町大尻
44	半崎Ⅱ	散布地	石鏃	夏井町半崎5-77	92	大尻Ⅱ	集落跡	縄文土器、石器	長内町大尻
45	半崎南Ⅳ	散布地	縄文土器	夏井町半崎	93	大尻Ⅲ	散布地	縄文土器	長内町大尻
46	鳥谷館	城館跡	堀	夏井町鳥谷	94	大尻Ⅳ	散布地	縄文土器	長内町大尻
47	大久保館	城館跡	なし	夏井町早坂	95	大尻Ⅴ	散布地	縄文土器	長内町大尻
48	麦生Ⅺ	散布地	縄文土器	侍浜町麦生					

各時代・時期のものが存在し、複合遺跡も多い。以下、調査された遺跡（図示されていない遺跡も含む）を中心に、時代別に概略を述べることとする。

縄文時代

遺物散布地には早期から晩期までの各時期を含むが、調査で検出された住居址としては上野山遺跡の後期前葉 3 棟・時期不明 1 棟、上野山遺跡の晩期 1 棟、中長内遺跡の後期 8 棟などがある。この時代のものと思われる陥し穴は三崎Ⅲ・兼田農場・中長内などの各遺跡で検出されており、形状も大別して溝状と円形のもの確認されている。

遺物では、後・晩期の土器を出土した遺跡が多く、特に大芦遺跡では包含層から大量に出土している。他に、早期の土器が平沢遺跡から、前期から中期にかけての円筒系土器が大尻遺跡^註から、中期の円筒系と大木系の土器が三崎Ⅲ遺跡から出土している。

弥生時代

調査によって確認された遺構はないが、土器を出土した遺跡としては三崎Ⅲ遺跡等がある。また、岩手県遺跡台帳によると10箇所^註の散布地がある。

古代

この時代の遺跡は比較的数多く調査されている。昭和40年代から50年代初めにかけては寺里・山屋敷・上新山遺跡の調査が、近年では上野山・上野山Ⅱ・小屋畑・兼田農場・中長内・平沢の各遺跡の調査が行われている。

奈良時代の住居址が検出された遺跡は山屋敷で 1 棟、上新山 2 棟、上野山 4 棟、上野山Ⅱ 2 棟、小屋畑 2 棟、平沢 2 棟である。その他に山屋敷では24棟、上新山で97棟の住居址の存在が地表面の土色の相違等から確認されている。

平安時代の住居址としては小屋畑で 9 棟、兼田農場で 8 棟が検出されている。他に、奈良時代から平安時代にかけての住居址が中長内遺跡で60数棟検出され、平沢遺跡で80数棟確認されている。

遺物では、上野山や中長内遺跡から琥珀の半加工品が出土し、久慈地方が琥珀の主産地として有名なことと合わせて注目される。

中・近世

この時代の遺跡としては、城館跡が上げられる。遺跡台帳には19箇所^註掲載され、岩手県中世城館跡分布調査報告書には久慈城・新城館・宇部館の 3 箇所が紹介されているが、発掘調査された遺跡はない。他に台帳には庚申塔などが掲載されている。

註) 中長内（昭和59・60年調査）、兼田農場（昭和60年調査）、平沢（昭和56・57年調査）、大尻（昭和61年調査）の各遺跡については久慈市教育委員会面代民義氏、千葉啓蔵氏の教示を受けた。



第7図 遺構配置図

IV 遺構と遺物

検出された遺構は陥し穴14基、ピット1基である。そのすべてが調査区南端の尾根から平坦地に至る斜面で検出された。調査区北側のA～D区には遺構は存在しなかった。陥し穴を平面の形状によって大別すると溝状陥し穴が13基、円形陥し穴が1基である。「陥し穴」とした遺構は、従来多くは「陥し穴状遺構」と呼ばれてきたものである。その機能・性格については種種論議があり、近年、類例の増加に伴い陥し穴とする考えが強まる傾向にある。本稿では厳密な概念規定に基づくものではないが、現時点では「陥し穴」と考えることが妥当だと思われることと、呼称の簡略化の意味で用いている。各遺構の記述にあたって、規模・形状等については遺構一覧表に掲げる。

遺構内から出土した遺物はなく、粗掘り中にⅠ～Ⅲ層から少量の土器片と石鏃1点、現代のものと思われる陶器2点を出土したのみである。

第2表 遺構一覧表

遺構名	開口部		底部		深さ	平面形	断面形	溝状陥し穴の長軸方向		備考
	長軸	短軸	長軸	短軸				方角	斜面に対する向き	
E-1 陥し穴	373 cm	60 cm	348 cm	8 cm	42~58 cm	溝状	V字状	N72° W	平行	
E-2 陥し穴	300	62	250	18	56~60	溝状	U字状	N52° W	平行	
E-3 陥し穴	343	75	295	12	53±	溝状	漏斗状	N74° W	平行	
E-4 陥し穴	380	71	365	16	80~88	溝状	漏斗状	N77° W	平行	
F-1 陥し穴	366	88	330	15	70~120	溝状	漏斗状	N14° W	斜め	
F-2 陥し穴	322	100	306	15	65~110	溝状	漏斗状	N21° W	斜め	
F-3 陥し穴	385	53	378	20	40~75	溝状	U字状	N29° W	斜め	
F-4 陥し穴	342	78	334	12	68~75	溝状	漏斗状	N67° W	平行	
F-5 陥し穴	288	48	298	20	57~62	溝状	漏斗状	E-W	直交	
F-6 陥し穴	295	60	263	20	60~66	溝状	U字状	N66° W	平行	
F-7 陥し穴	360	65	316	16	74~90	溝状	漏斗状	E-W	斜め	
F-8 陥し穴	385	52	412	22	50~70	溝状	U字状	E-W	斜め	
F-9 陥し穴	440	53	462	15	55~74	溝状	漏斗状	N46° W	平行	
F-10 陥し穴	137	132	100	91	43~84	円形	ビーカー状			小穴を伴う
F-11 ピット	142	93	142	103	30±	円形	フラスコ形			斜面下部不明

注) 溝状陥し穴の短軸の値は中央部付近の計測値である。

1. 陥し穴

E-1 陥し穴 (第8図、PL-3)

斜面下方、グリッドEh7付近に位置する。付近は基本層序Ⅱ・Ⅳ層を欠き、Ⅴ層上面が検出

面である。平面形は開口部・底部とも溝状で、両端が若干ふくらみ、短軸の断面形はV字状を呈する。長軸の両端は中央部より掘り込みが若干深く、壁は直立する。掘り込みはV層までで、VI層には達していない。

埋土は3層に分かれ、上部はIII層起源の黒色土、下部はV層起源の汚れた粘性土である。

E-2 陥し穴 (第8図、PL-3)

斜面下方、E-1 陥し穴の西約5 mに位置し、検出面も同じV層上面である。平面形は溝状で、短軸の断面形はU字状を呈し、壁は外傾する。底部は平坦で、VI層まで掘り込んでいる。

埋土は5層に分かれ、黒色土・黒褐色土が卓越するが、上部の西側半分にVI層と同質の明黄褐色粘土が黒色土に包まれるように混入する。

E-3 陥し穴 (第9図、PL-3)

E-1 陥し穴から約5 m斜面の上方に位置する。検出面は基本層序IV層である。平面形は溝状で両端がやや角張る。短軸の断面形は上部が広く、下部が狭い漏斗状を呈する。長軸の両端の壁は外傾しており、下部は直立に近い。掘り込みはVI層に達し、底部は平坦である。

埋土は5層に分かれ、黒色土・黒褐色土が卓越する。最上部の暗褐色粘質土は検出面の上位35cmのIII層土中から観察されていたが、その面でのプランは不明であった。表土層からの土層断面でも、本遺構がIII層を切り込んでいる状態は観察されなかった。

E-4 陥し穴 (第9図、PL-4)

E-3 陥し穴から約3 m斜面の上方に位置し、検出面も同じくIV層である。平面形は溝状で底部は開口部に対して長軸の中心からやや南側(斜面上方)に寄る。短軸の断面形は片側に段差を持つ漏斗状である。長軸両端および斜面上方の壁は若干内傾する。

埋土は5層に分かれ、東側半分の最上部にE-2 陥し穴と同様黄褐色～褐色の粘質土が入り、中部は黒色土・黒褐色土が卓越する。下部の第5層は黒色土と黄褐色土が互層状に堆積したものである。埋土の状況はE-2 陥し穴に酷似する。

F-1 陥し穴 (第10図、PL-4)

本遺構は斜面の傾きが緩くなるグリッドFa9・10に位置する。検出面はIV層である。平面形は溝状であるが、E区の遺構に比較して開口部の幅が広い。底部は幅が狭く、斜面下方側の端がふくらむ。短軸の断面形は片側に段差を持つ漏斗状である。斜面上方側の壁は内傾するが、他は外傾する。

埋土は11層に細分され、黒色土・黒褐色土が卓越する。最上部にVI層起源の粘土が入る状態はE-3陥し穴等に類似する。

F-2陥し穴（第10図、PL-4）

F-1陥し穴に並列し、その間隔は開口部で10~25cmである。検出面も同じくIV層で、平面形・断面形・埋土の状態もF-1陥し穴にきわめて類似する。

F-3陥し穴（第11図、PL-5）

F-2陥し穴に平行し、その西側約2mに位置する。検出面はIV層、平面形は溝状、短軸の断面形はU字状である。壁は長軸の両端が若干内傾する。掘り込みが浅くV層までである。

埋土は4層に分かれ、黒色土・黒褐色土が卓越する。

F-4陥し穴（第11図、PL-5）

グリッドFc7付近に位置し、検出面はIV層である。平面形は溝状であるが、幅が広く、F-1陥し穴等に類似する。短軸の断面形はU字形に近い漏斗状である。長軸両端の壁は内傾ないしは直立する。

埋土は5層に分かれ、上部は黒色土ないし黒褐色土、下部は黒褐色土と褐色系の粘質土の混土である。

F-5陥し穴（第12図、PL-5）

グリッドFb10に位置し、検出面はIV層である。平面形は若干不整形な幅の狭い溝状である。短軸の断面形はF-1陥し穴類似の漏斗状、長軸の斜面上方端の壁は挟り込まれて内傾する。

埋土は黒褐色土が卓越し、最上部には明黄褐色粘土が不整に堆積する。規模は異なるが、形状・埋土の状況はF-1陥し穴によく類似する。

F-6陥し穴（第12図、PL-6）

F-4陥し穴から斜面上方約2mに並列して位置し、検出面もIV層である。平面形は溝状で、両端が角張る。短軸の断面形はU字状を呈し、壁は外傾する。

埋土は黒褐色土が卓越し、最上部にE-3陥し穴類似の褐色粘性土が堆積する。

F-7陥し穴（第13図、PL-6）

今まで述べてきた遺構群とやや距離を隔てた斜面上方のグリッドFf12付近に位置する。F

ー5陥し穴から約10m斜面上方にある。平面形は溝状、短軸の断面形は開口部がやや開く漏斗状を呈する。

埋土は上部が黒色土・黒褐色土で、下部には黒色土が薄層をなして堆積しにぶい黄橙色土が卓越する。

F-8陥し穴（第13図、PL-6）

F-7陥し穴に並行し、その西側約6mに位置する。平面形は幅の狭い溝状、短軸断面形U字形を呈す。長軸両端の壁は内傾する。

埋土は7層に細分され、上部が黒色土・黒褐色土で、下部が粘土層起源のにぶい黄橙色土である。

F-9陥し穴（第14図、PL-7）

検出された陥し穴の中では最も斜面上方のグリッドFh11・12に位置する。平面形は細長い溝状で、幅と長さの比は溝状陥し穴13基中の最大である。短軸の断面形はU字形に近い漏斗状を呈し、長軸両端の壁は外側に掘り込まれて内傾する。

埋土は5層に分かれ、黒褐色土が卓越する。下部に粘土層起源のにぶい黄橙色土が堆積する。

F-10陥し穴（第14図、PL-7）

グリッドFe13に位置し、F-7陥し穴に切られている。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。斜面上方側の壁は中位から開口部にかけて外傾し、他はほぼ直立する。断面形はピーカー形状と言える。底面は平坦で、そのほぼ中央に径約10cm・深さ4～7cmの小穴2個を伴う。

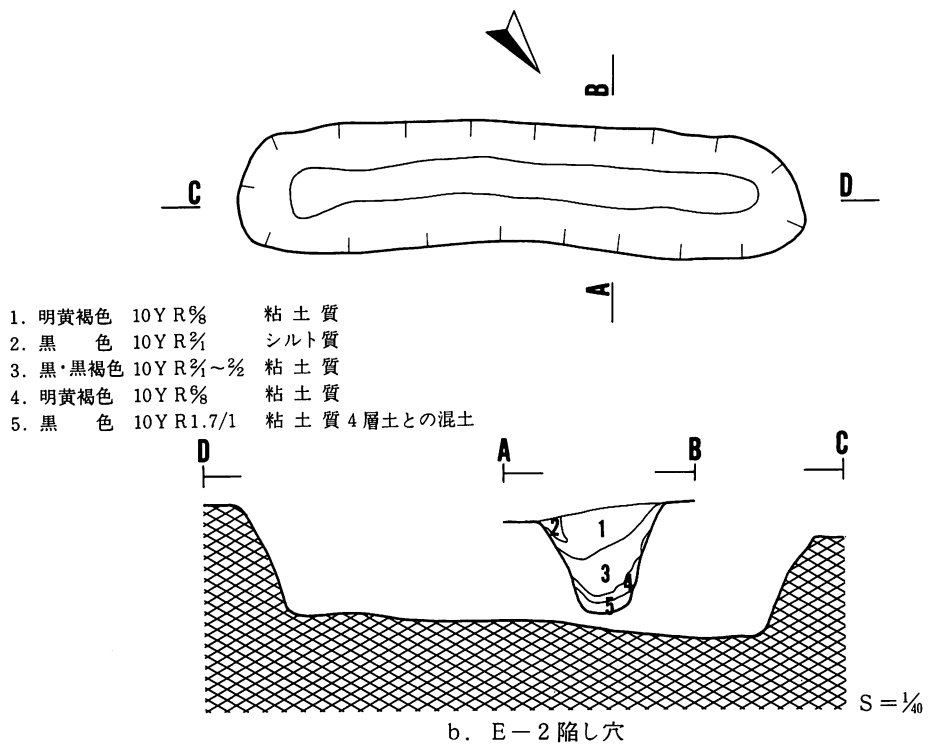
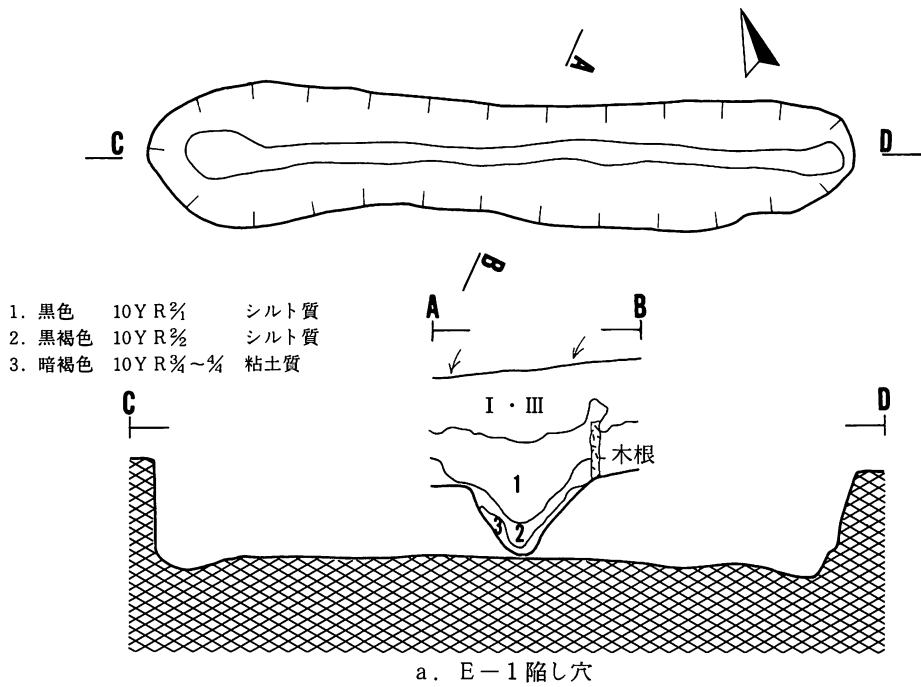
埋土は7層に細分され、上・中部と最下部壁際に黒色土・黒褐色土が、下部に粘土層起源の黄褐色土やにぶい黄橙色土が堆積する。

2. ピ ッ ト

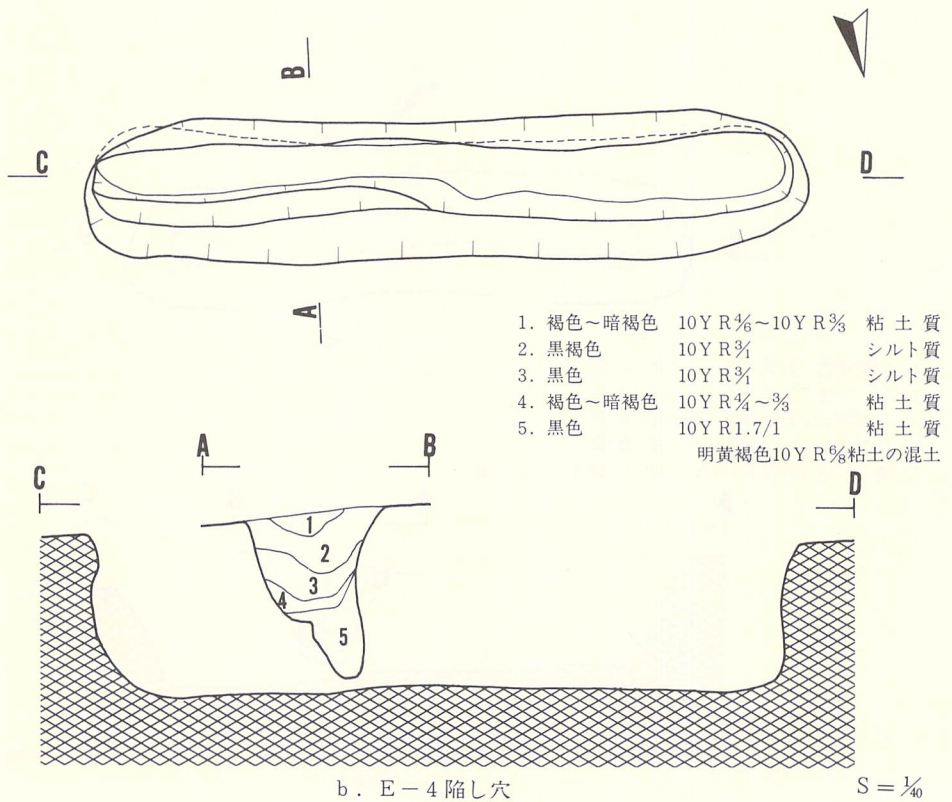
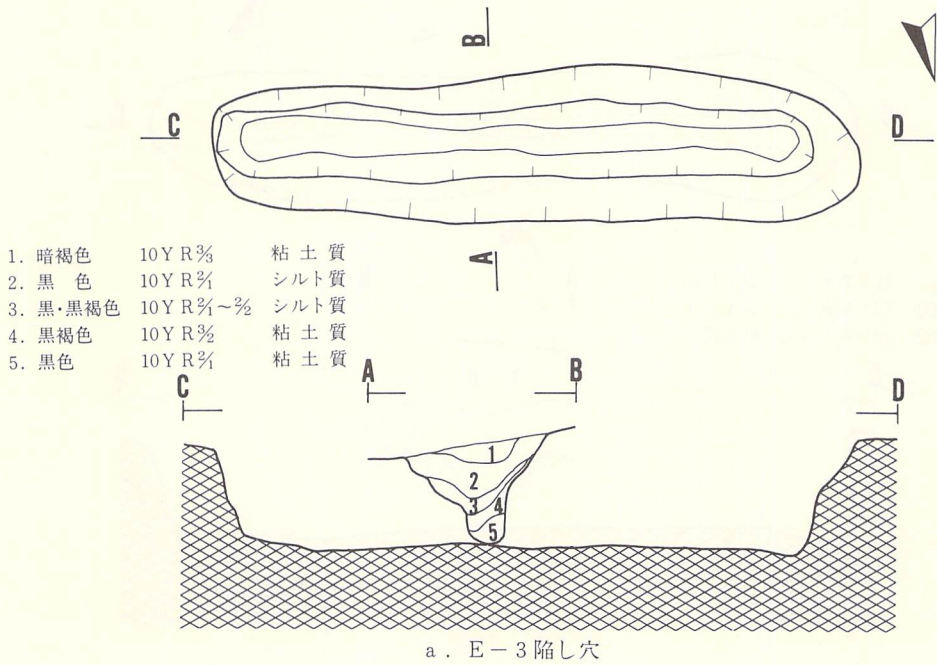
F-11ピット（第14図、PL-7）

検出された唯一のピットで、尾根頂部に近いグリッドFh17に位置する。削平されているため、検出された部分の平面形は不整であるが、本来は開口部・底部とも円形と推定される。斜面上方側の壁は内湾し、下方側の壁および底面の一部は残っていない。底面はゆるやかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。断面形はフラスコ形を呈する。

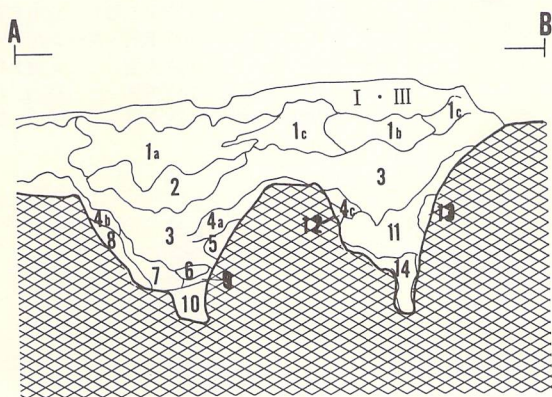
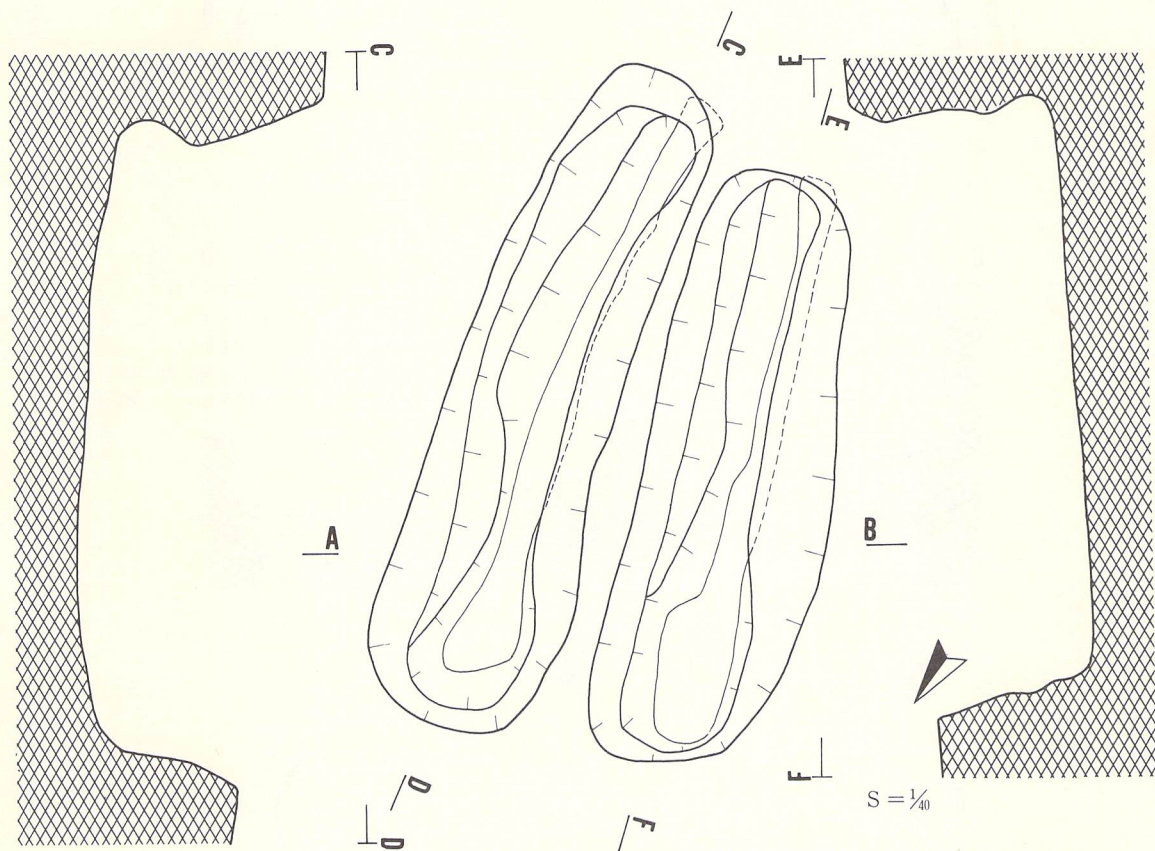
埋土は黒色土が卓越し、一部に褐色土塊を含む。



第8図 陥し穴(1)



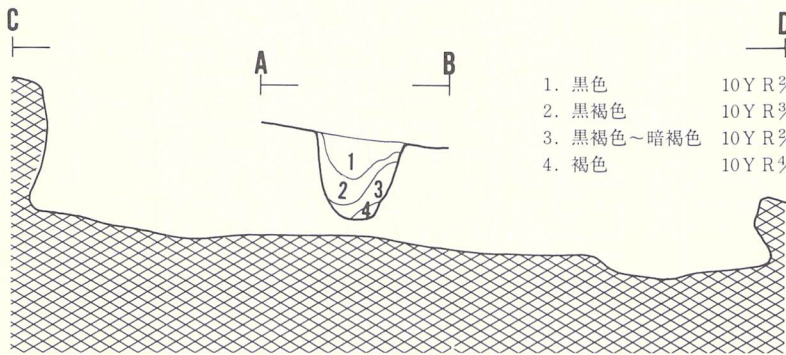
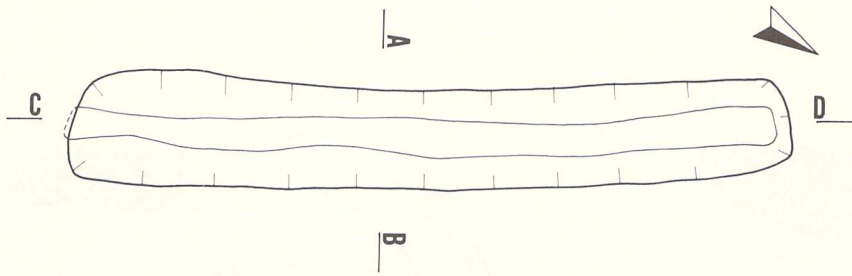
第9図 陥し穴(2)



- | | | |
|-------------|-------------------------------------|------|
| 1 a 黒褐色～暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ ～ $\frac{3}{3}$ | シルト質 |
| 1 b 黒褐色～暗褐色 | 10Y R $\frac{3}{2}$ ～ $\frac{3}{3}$ | シルト質 |
| 1 c 黒褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | シルト質 |
| 2. 黒色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ | シルト質 |
| 3. 黒・黒褐色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ ～ $\frac{2}{2}$ | シルト質 |
| 4 a 黒褐色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ | シルト質 |
| 4 b 黒褐色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ | シルト質 |
| 4 c 黒褐色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ | シルト質 |
| 5. 暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | 粘土質 |
| 6. 黒色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ | シルト質 |
| 7. 黒褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | シルト質 |
| 8. 暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | 粘土質 |
| 9. 黒褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | 粘土質 |
| 10. 黒褐色～暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ ～ $\frac{3}{3}$ | 粘土質 |
| 11. 黒褐色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ ～ $\frac{2}{2}$ | シルト質 |
| 12. 暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | 粘土質 |
| 13. 暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{2}$ | 粘土質 |
| 14. 黒色 | 10Y R $\frac{1}{1}$ | 粘土質 |

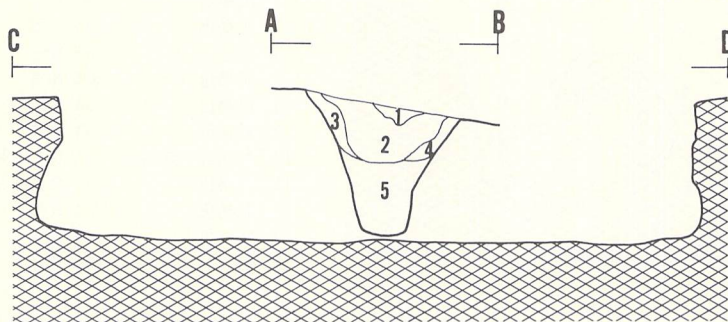
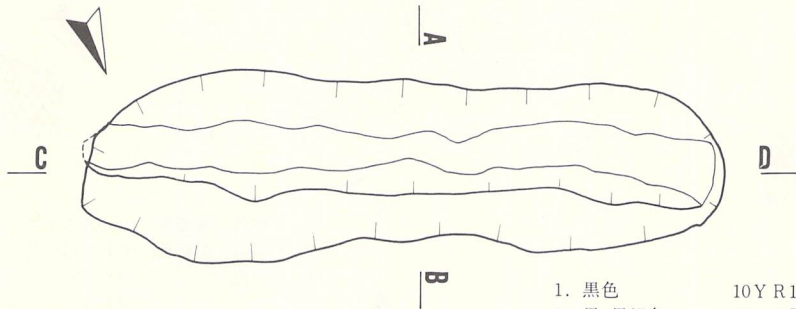
F-1・F-2 陥し穴

第10図 陥し穴(3)



- | | | |
|------------|-------------------------------------|------|
| 1. 黒色 | 10Y R $\frac{1}{2}$ | シルト質 |
| 2. 黒褐色 | 10Y R $\frac{3}{4}$ | シルト質 |
| 3. 黒褐色～暗褐色 | 10Y R $\frac{2}{3}$ ～ $\frac{3}{4}$ | 粘土質 |
| 4. 褐色 | 10Y R $\frac{1}{2}$ | 粘土質 |

a. F-3 陥し穴

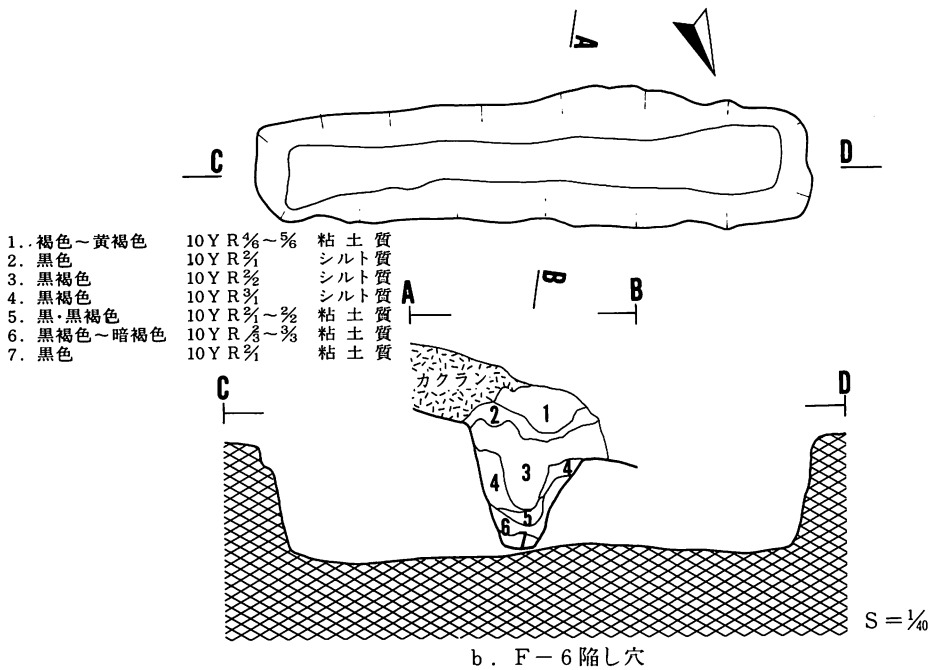
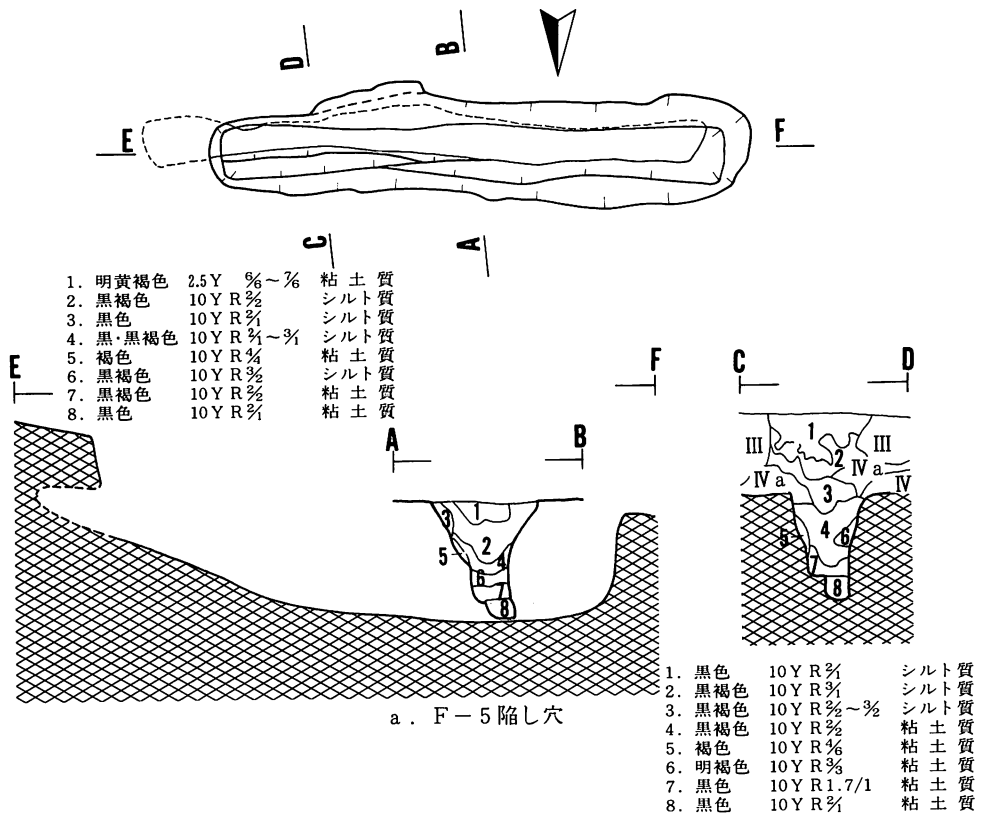


- | | | |
|------------|-------------------------------------|------|
| 1. 黒色 | 10Y R 1.7/1 | シルト質 |
| 2. 黒・黒褐色 | 10Y R $\frac{2}{1}$ ～ $\frac{3}{2}$ | シルト質 |
| 3. 黒褐色 | 10Y R $\frac{3}{4}$ | シルト質 |
| 4. 黒褐色 | 10Y R $\frac{3}{2}$ | 粘土質 |
| 5. 黒褐色～暗褐色 | 10Y R $\frac{3}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ | 粘土質 |

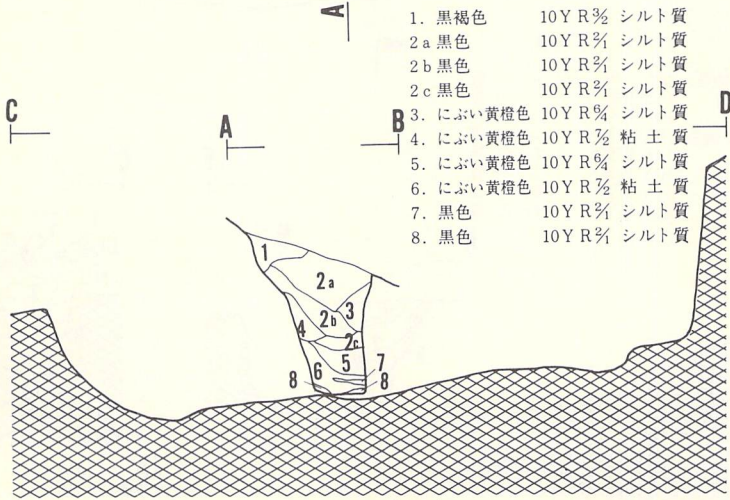
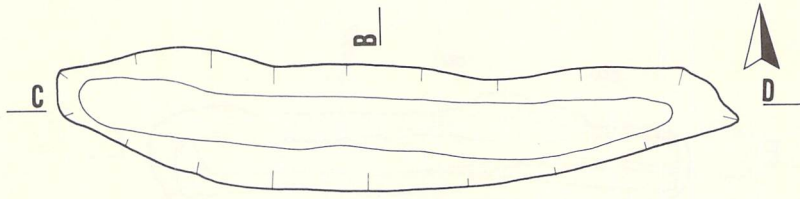
b. F-4 陥し穴

S = $\frac{1}{40}$

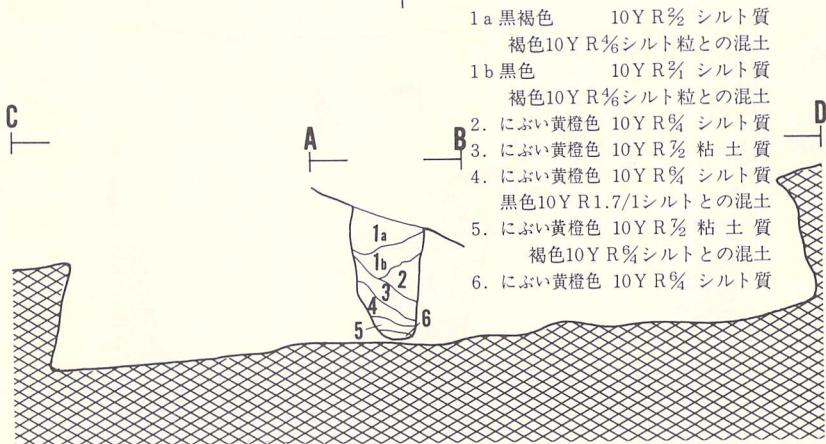
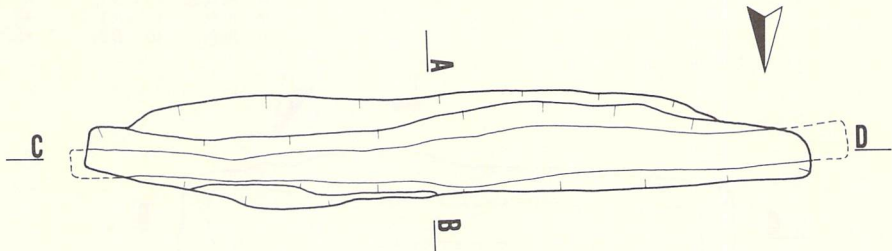
第11図 陥し穴(4)



第12図 陥し穴(5)



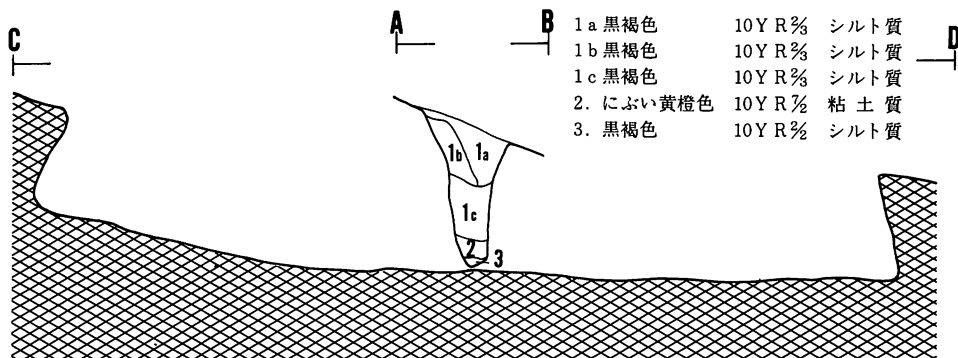
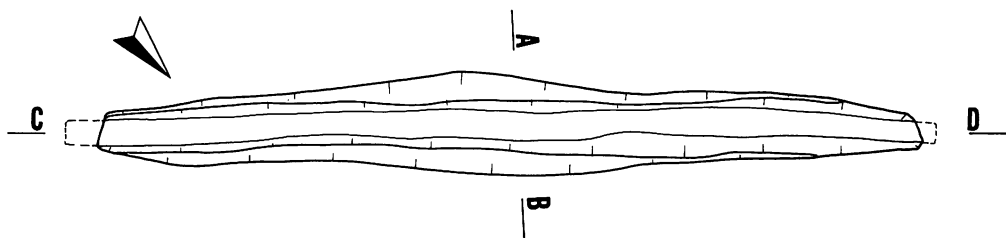
a. F-7 陥し穴



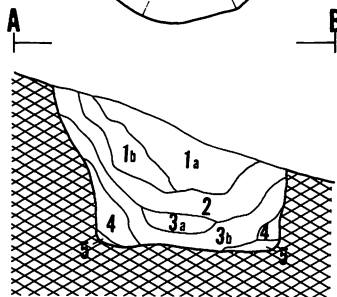
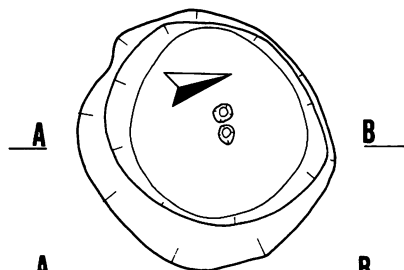
S = 1/40

b. F-8 陥し穴

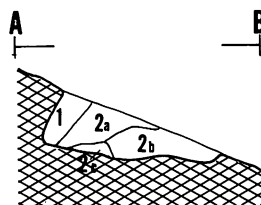
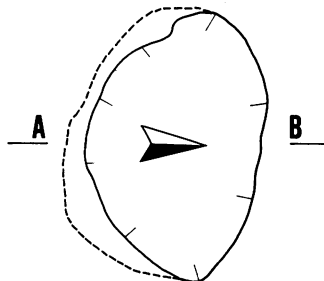
第13図 陥し穴(6)



a. F-9 陥し穴



b. F-10 陥し穴



c. F-11 ピット

- 1a 黒色 10Y R 1.7/1 シルト質
- 1b 黒色 10Y R 5/2 シルト質
- 2 黒色 10Y R 5/2 シルト質
- 3a 暗褐色 10Y R 5/2 シルト質褐色10Y R 5/2 シルトとの混土
- 3b 黄褐色 10Y R 5/2 シルト質
- 4 にぶい黄橙色 10Y R 5/2 粘土質
- 5 黒褐色 10Y R 5/2 シルト質

- 1. 黒褐色 10Y R 5/2 シルト質
- 褐色10Y R 5/2 シルト塊との混土
- 2a 黒色 10Y R 1.7/1 シルト質
- 2b 黒色 10Y R 1.7/1 シルト質
- 2c 黒色 10Y R 5/2 シルト質

第14図 陥し穴(7)・ピット

3. 遺物

出土遺物は非常に少ないため、現代のものと思われる遺物以外はすべて写真図版に掲載した。土器には縄文土器と土師器とがある。以下、縄文時代と古代の遺物について述べ、現代と思われる遺物については省略した。

(1) 縄文時代の遺物 (第15図、PL-8の1・2)

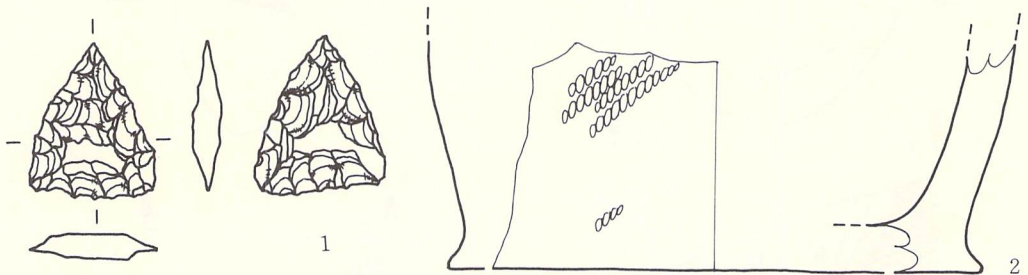
石鏃1点と鉢の底部片1点だけである。石鏃はグリッドEf7のI層から出土した。平基型で長さ1.98cm、幅1.74cm、厚さ0.48cm、重さ1.32gである。調整は両面加工であるが、一部に一次剝離面を残す。石質は北上山地古生界産の粘板岩である。

土器はグリッドEh6のⅢ層とEi5のI層から出土したものが接合した。地文は横位のLRの縄文で、時期は不明である。

(2) 古代の遺物 (PL-8の3~17)

3~8の土器片はいずれも遺構の存在しなかったA~D区のⅡ層中からの出土である。小破片で、中には摩滅して土師器と断定しかねるものもある。3~5は口縁部、他は体部の破片で、器種はいずれも甕と思われる。

9~17は調査区には隣接する北西側の畑から表採したものである。摩滅しているものもあるが、土師器であろう。すべて甕と思われる体部の小破片である。



第15図 出土遺物

V ま と め

検出した遺構15基のうち14基が陥し穴であり、陥し穴について若干述べてまとめとする。

形状

平面形が溝状の陥し穴13基、円形の陥し穴1基である。溝状陥し穴をさらに短軸断面形で分けると、U字状を呈するもの4基、V字状1基、漏斗状8基である。漏斗状のものには途中

に段差を持つタイプ（E-4 陥し穴他）と壁が途中から外傾するタイプ（E-3 陥し穴他）とがある。前者の場合、段差は片側にだけあり、斜面下方側（斜面に直交するF-5 陥し穴を除く）に持つ。長軸両端の壁は、外傾するものもあるが、多くは直立ないしは内傾する。

規模

一様ではないが、溝状陥し穴の大部分は開口部の長軸（長さ）3～4 m、短軸（幅）0.5～1 m、深さ0.5～1 mである。溝状・円形とも、陥し穴としては他遺跡の類例に比べ、浅い傾向にある。これは遺構上部の流失や検出面をⅣ層まで掘り下げたためである。

埋土

多くは黒色土・黒褐色土が卓越し、いずれも自然堆積の様相を呈する。半数の遺構の最上部には、黄褐色～褐色の粘性土が堆積している。これらの粘性土はⅢ層土中から観察されているが、Ⅲ層でのプランは確認できなかった。また、土層の断面観察でⅢ層を切り込む遺構も確認されていない。この粘性土の起源としては、遺構の掘り下げの際に生じた土の再堆積と斜面上方の地山の流入とが考えられる。

占地・配列

遺構が構築されている斜面は、尾根から18度程度の勾配で下った後、標高46～44m 付近で21度前後の急傾斜となり、その下方は7～12度の緩斜面となる。遺構は上方の斜面と下方の緩斜面にあり、上方よりも下方に集中する。また、遺構は調査区外の東西方向にも広がる事が予想される。

溝状陥し穴の等高線に対する長軸の方向は、平行するもの6基、直交1基、斜め5基で、直交するものは少ない。

時期

時期を特定する資料は発見されていないが、これまでの類例からおおむね縄文時代と考えられる。切り合いから相対的な新旧関係の分かる遺構としてはF-7 陥し穴とF-10 陥し穴があり、後者が古い。後者は円形陥し穴で、両者の時期差は分からないが、浄法寺町五庵Ⅰ遺跡・軽米町大堤Ⅱ遺跡^{註)}等の類例では円形陥し穴が溝状陥し穴より古く、切り合いによる新旧関係はそれらと矛盾しない。

註) 昭和61年発掘調査。溝状陥し穴と円形陥し穴が中振浮石層を挟んで、その上位と下位から検出されている。

〈引用・参考文献〉

- 石野公一 1976 『北上山系開発地域土地分類基本調査』 久慈・岩手県企画開発室
- 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」 『霧ヶ丘』 霧ヶ丘遺跡調査団
- 今村啓爾 1976 「縄文時代の陥し穴と民族誌上の事例の比較」 『物質文化』 No27
- 久慈市史編纂委員会 1984 『久慈市史』
- 坂川 進 1982 『長七谷地遺跡発掘調査報告書』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 佐々木和久 1985 『大芦遺跡発掘調査報告書』 久慈市文化財調査報告書第5集
- 瀬川司男・佐々木勝 1976 『山屋敷遺跡発掘調査報告書』 久慈市文化財調査報告書第1集
- 瀬川司男・島 隆 1979 『上新山遺跡発掘調査報告書』 久慈市文化財調査報告書第3集
- 田鎖寿夫 1984 『小屋畑遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第80集
- 千田和文 1978 『三崎Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 久慈市文化財調査報告書第2集
- 照井一明 1982 「陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系」 岩手県高等学校教育研究会地理部会
- 福田友之 1983 『鶏窪遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 村上達夫・佐々木清文 1983 『上野山遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集
- 村田文夫 1982 「おとし穴」 季刊『考古学』 1号
- 面代民義 1984 『上野山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 久慈市文化財調査報告書第4集
- 渡辺洋一・石川長喜 1986 『五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集
- 渡辺 誠 1974 「食料資源」 『考古学ジャーナル』 No100
- 渡辺 誠 1982 「縄文人の世界——食べ物を中心に」 『創造の世界』 41号

写真図版



a. 遠景（西から）



b. 近景（北東から）

PL-1 遺跡遠景・近景



a. 基本層序(Ej 7 グリッド)



b. 基本層序(Dj 4 グリッド)

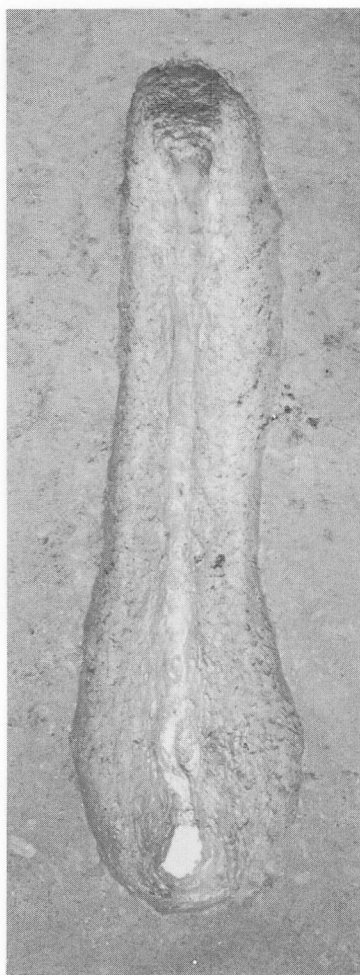


c. 基本層序(Cj 5 グリッド)



d. 作業風景

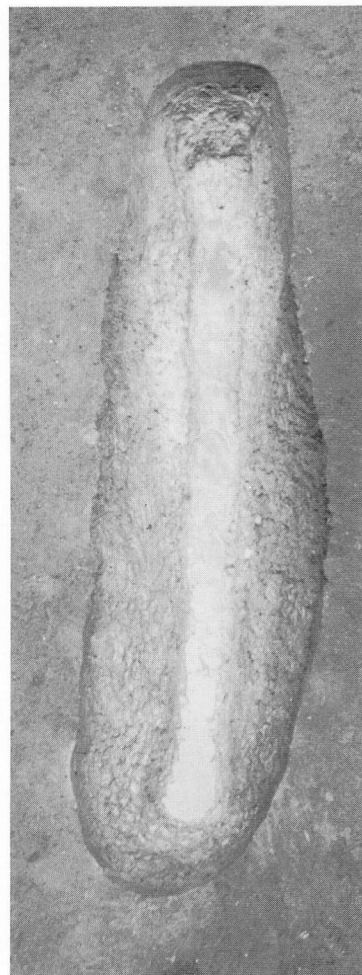
PL-2 基本層序・作業風景



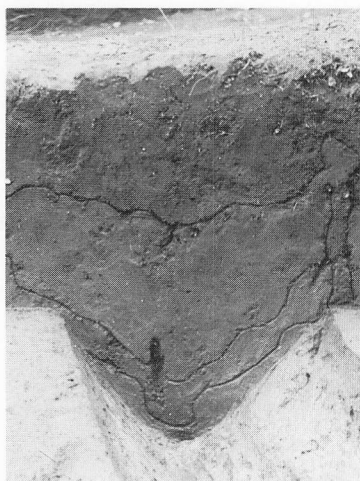
(全景)



(全景)

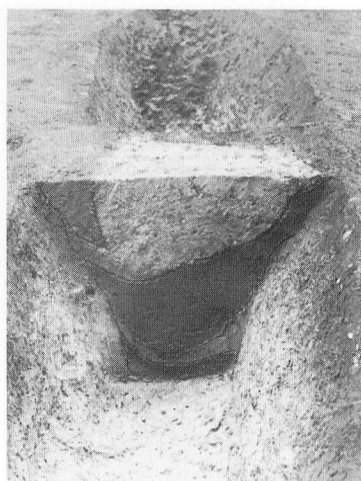


(全景)



(土層断面)

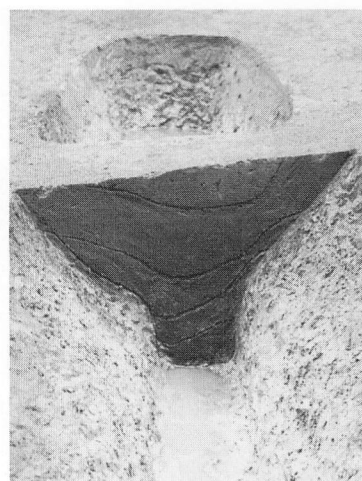
a. E-1 陥し穴



(土層断面)

b. E-2 陥し穴

PL-3 陥し穴(1)

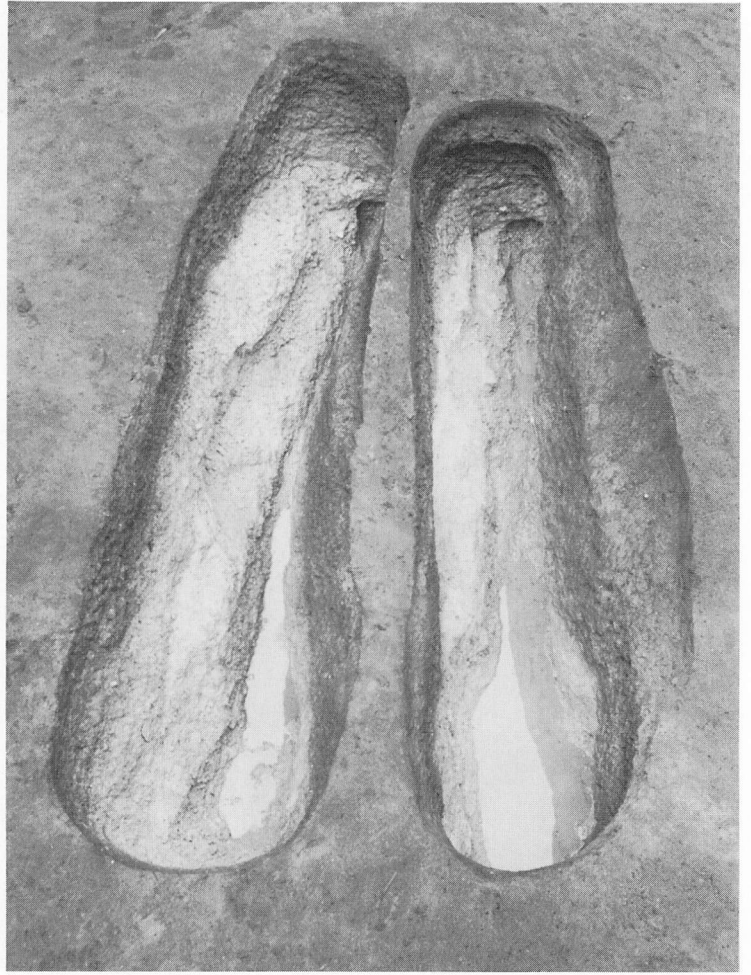


(土層断面)

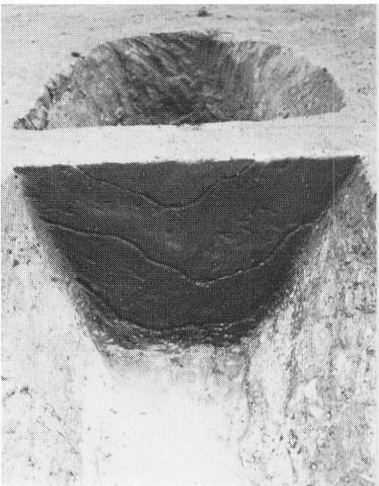
c. E-3 陥し穴



(全景)



(全景)



(土層断面)

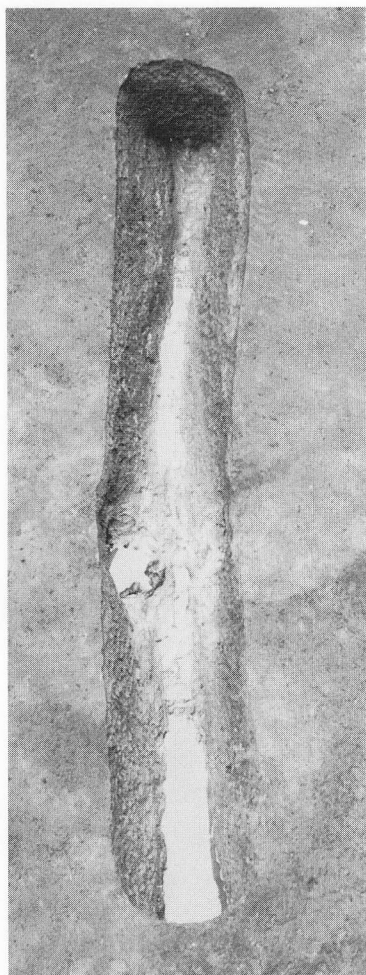
a. E-4 陥し穴



(土層断面)

b. F-1・F-2 陥し穴

PL-4 陥し穴(2)



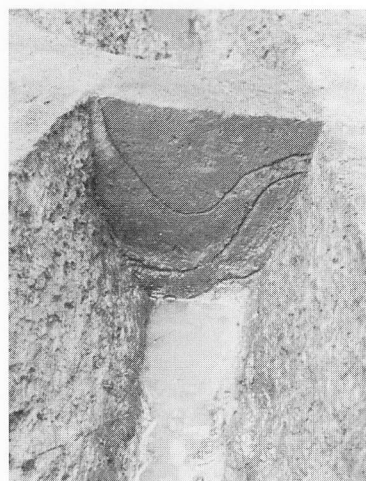
(全景)



(全景)

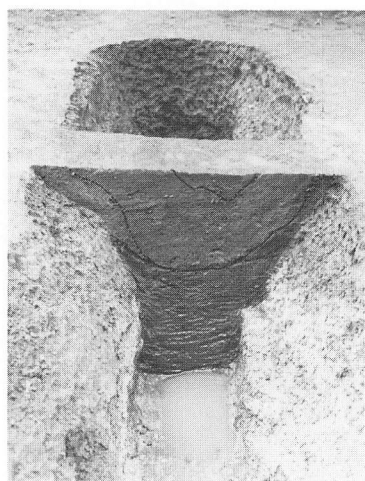


(全景)



(土層断面)

a. F-3 陥し穴



(土層断面)

b. F-4 陥し穴



(土層断面)

c. F-5 陥し穴

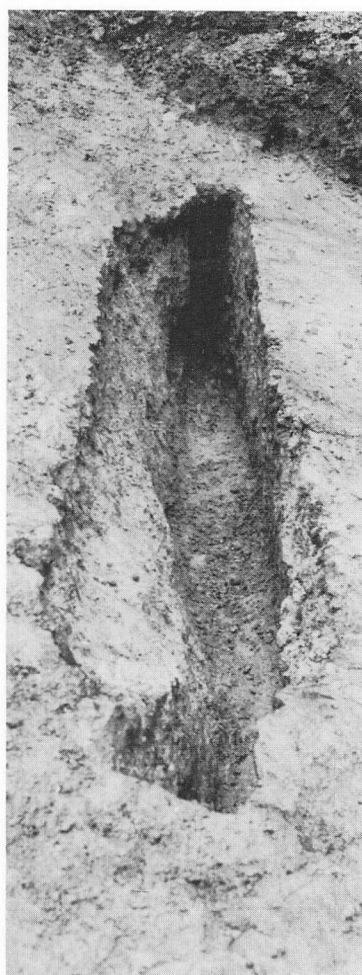
PL-5 陥し穴(3)



(全景)



(全景)



(全景)



(土層断面)

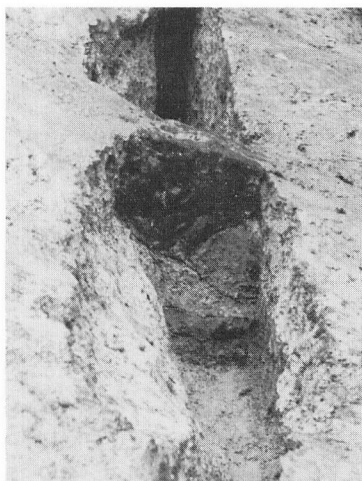
a. F-6 陥し穴



(土層断面)

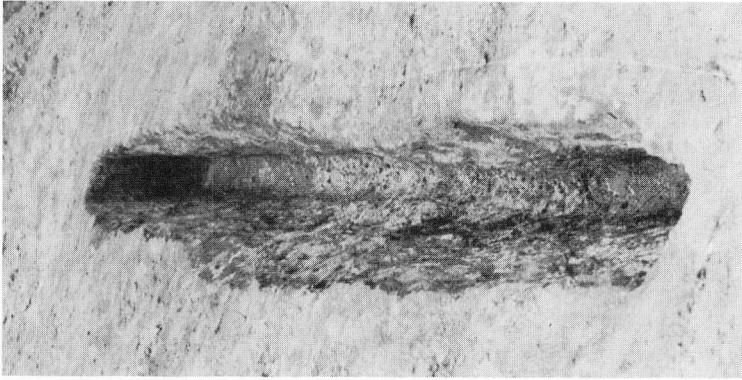
b. F-7 陥し穴

PL-6 陥し穴(4)



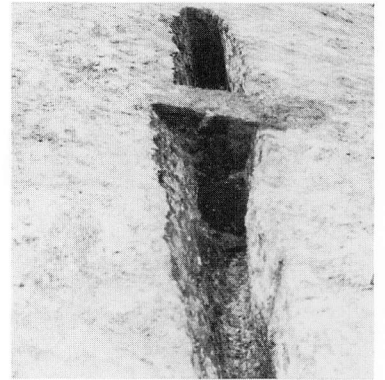
(土層断面)

c. F-8 陥し穴



(全景)

a. F-9 陥し穴

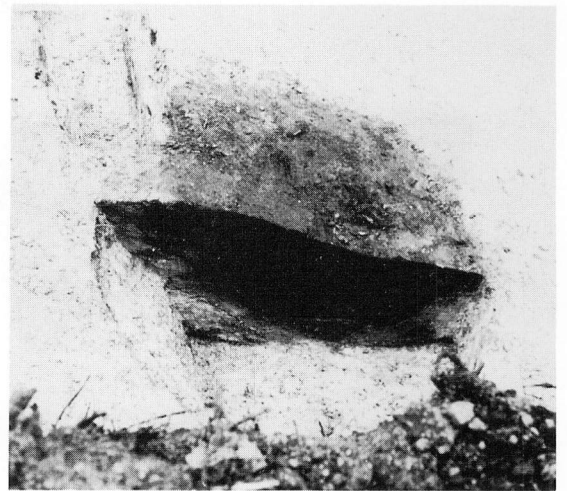


(土層断面)



(全景)

b. F-10 陥し穴



(土層断面)



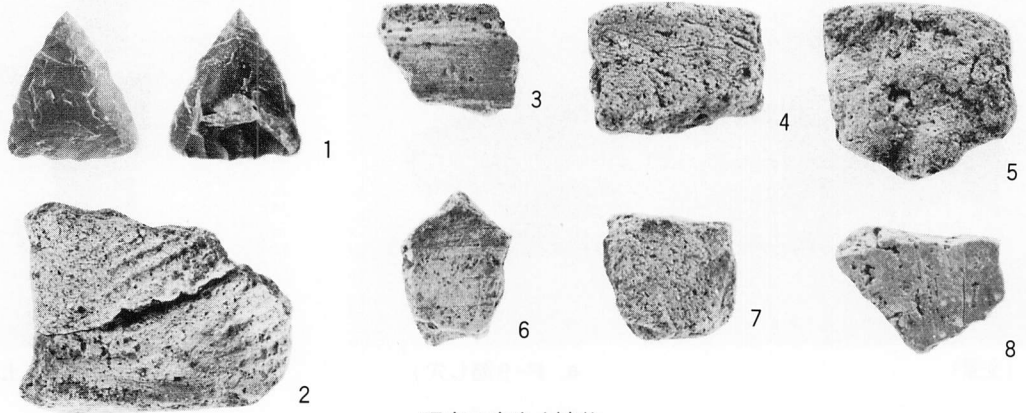
(全景)

c. F-11 ピット

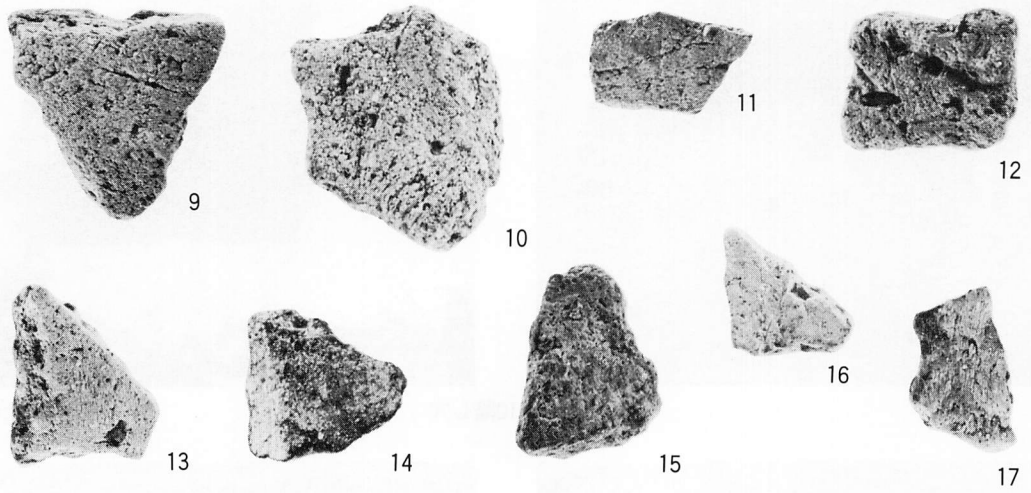


(土層断面)

PL-7 陥し穴(5)・ピット



調査区内出土遺物



調査区外表採遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二
副 所 長	宮 英 一

〔管 理 課〕

課 長(兼)	宮 英 一
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎
主 事	立 花 多加志
嘱 託	似 内 喜 兵
運転技士兼技能員	佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

課 長	昆 野 靖
主任文化財専門調査員	小 田 野 哲 憲
〃	三 浦 謙 一
〃	工 藤 利 幸
文化財専門調査員	佐々木 嘉 直
〃	平 井 進
〃	中 村 良 一
〃	田 村 壮 一
〃	光 井 文 行
〃	玉 川 英 喜
〃	佐 藤 嘉 広
〃	中 川 重 紀
〃	高 橋 義 介
〃	酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

課 長	新 田 和 雄
主任文化財専門調査員	高 橋 与右工門
文化財専門調査員	田 鎖 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第117集

田中Ⅳ遺跡発掘調査報告書

国家石油備蓄基地建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 昭和62年7月25日

発行 昭和62年7月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6番49号

電話 (0196) 53-4151

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987